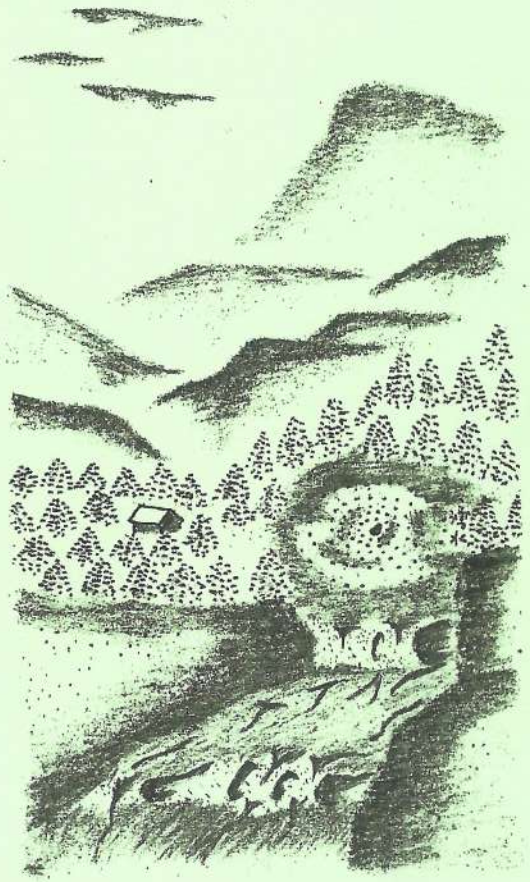
湧水



湧水　第七号　平成二十八年四月　発行

千代田岳精会　自作自詠俳句研修会

湧水第七号　目次　（アイウエオ順）

作者俳号	名	頁
磯田烏城	（貞二）	1
岩崎泰俊	（泰俊）	2
鵜飼てるお	（輝夫）	3
川口童人	（榮三）	4
神田つねこ	（恒子）	5
菊地駿風	（利廣）	6
久保合風	（合介）	7
小林ともこ	（智子）	8
近藤まき	（まき子）	9
塩月崇史	（崇史）	10
鈴木陵人	（重成）	11
滝沢はる	（はる）	12
徳本順治	（順治）	13
橋本千舟	（隆一）	14
八田玄猷	（豊）	15
藤原壽	（壽子）	16
細川をさむ	（修）	17
前田道人	（道紀）	18
湯山得自楼	（徳次郎）	19
随想	近藤まき	20
随想	塩月崇史	21

「折々に」　　磯田烏城（貞二）

米寿とて吟友集ひ百日紅

坪庭にかたまり出でし蕗の薹

水ぬるむ吟ずる妻の声清し

独り居の庭に咲きそむ紅椿

熱燗の小一合なり独り酒

春隣仕舞のひとの裾裁き

天神の筆塚古りて藤ゆるる

稚拙なる我が句温めて年惜しむ

「年新た」　　岩崎泰俊（泰俊）

年新た稽古に挑む吟士かな（自作）

卒寿への三年日記買ひにけり（ＮＨＫ）

天高し我が胃袋もつめ放題（ＮＨＫ）

三猿の逆を生きんと老の春（朝日）

くしゃみ出て出来し一句を忘れけり（朝日）

もう会へぬ人と想ひつ書く賀状（朝日）

「なづな粥」　鵜飼てるお（輝夫）

なづな粥湯気のむかふに母の顔
舞ひ上がり宙返へりして落葉かな
春雨やいつしか濡るる己が肩
谷川に藤房垂れて裏高尾
夏の風一風呂浴びてぬれ縁に
夕映えの浜に独りや鰯雲
白菜の四つ切りを買ひ老夫婦
過ぎしこと捨てられもせず年用意

「年用意」　川口童人（榮三）

南北の連山みどり春深し
薬師池野山背にもち今朝の秋
久し振り顔かお語る夏の風
いつもより雨降る音は梅雨の朝
長き夜や落語聞きつつ目をつぶる
暴風の凄まじき音胆を抜き
薬寿園白菜漬けや客迎へ
遺言の纏め難し年用意

「春の色」　神田つねこ（恒子）

日当たりの庭に飛び石草萌ゆる
ベランダや黒葉すみれの鉢並ぶ
見渡せば園の隅まで春の色
敷わらに青き実をのせ苺かな
川土手や草のさざ波夏の風
又電話すわる間もなき長き夜
夕暮れの並木路月の冷まじき
白菜の我が者顔や農業祭

「白菜」　菊地駿風（利廣）

通り道垣根に息吹く春の色
散策や林を抜ける初夏の風
近所の子母をみながら山車を引き
墓参りはだか祭にむかへられ
白菜にふるさとおもふ朝餉かな
軒下に白菜ならべ故山ながむ
ささやかな幸せのあり年用意
休日にガラス窓ふき年用意

「ふらここ」　久保合風（合介）

海神（わだつみ）の霊に捧げむ屠蘇一杯
水槽の魚目を交はし冴へ返る
夫婦して歩む土手道草萌ゆる
頬染めて吟ずる友や春来る
ふらここや泣きじゃくる孫そっと抱き
藤棚やはすかいに見ゆ富士の山
祭衆揃いの襷緑色
栗好きの娘に電話夜更けかな

「甚平」　小林ともこ（智子）

甚平や曾孫の丈に針運ぶ
山の宿蝉の声消す通り雨
草を刈る忘れ得ぬこと古里に
新盆や魂のせて帰る道
迷ひたる蟷螂庭に逃しやる
ままならぬ後片付けや暮の秋
大利根やさざ波の間に鴨の群
去年今年夫の手箱を見つめつつ

「風」　近藤まき（まき子）

傘あふり路地を抜けゆく夏の風
夏の風ここにいるよと鯉泳ぐ
梅雨晴間シャツと雨がさ並びおり
夜の更けて輪の解けゆく盆おどり
子ぎつねの大きく跳ねて山車舞台
冷さまじや木の葉のゆれて衿立てる
断舎離を迷ひながらの年用意
年用意スマホ片手の築地かな

「冷まじ」　塩月崇史（崇史）

冷まじやタッチアンドゴーの基地の空
くちなしの花開き朝の通ひ路
篝火や御陣乗太鼓に偲ぶ夏
川土手に目白並びや花火待つ
長き夜やコルトレーンを一人聞く
ベランダの干白菜に光あり
冷まじやタックル激しラグビー戦
アメ横と築地をめぐり年用意

「送る」　鈴木陵人（重成）

七草やこの穏かさ永遠にとぞ

昆虫を画き万歳下萌ゆる

小さき手が搗く杵の音や春光る

藤蔓やかくあれかしと瞠りけり

釣人の佇む川面夏の風

怪我癒えて駆け出す笑顔梅雨晴間

夏祭駅壁面で踊りけり

冷まじや亡き師を送る吟の声

「北陸路」　滝沢はる（はる）

北陸の畔道ぬかり草青む

寒空や病む姉見舞ふ北陸路

友よりの絵手紙に有り春の色

交差点タンポポの絮飛びており

境内に香のただよひ夏の風

砂浜にスマホのあかり夜長かな

秋の海日の出にむきて手を合はす

北陸の友より届く今年米

「兄」　　徳本順治（順治）

兄逝きて七種粥に思ひあり
箱根路や湖面のきらら春の色
山車曳きし兄今はなし黄泉の国
長き夜や終電の音遠く消ゆ
吟行の小春日和や伊豆の海
浅漬けの白菜旨し母の味
夫婦してデパ地下めぐり年用意
ボーナスや遠い昔のこととなり

「祭髪」　　橋本千舟（隆一）

朝厨や七草粥の湯気上がる
城山の竹林は濃し春の色
夏の風絵画展出て余韻あり
先触れの娘三人祭髪
長き夜や闇の中より列車音
冷まじや横穴墓に鑿の跡
外葉削ぎ白菜出荷準備かな
浜小屋の軒に網干し年用意

「むかご採る」　八田玄猷（豊）

夏去りて流木一つ由比ケ浜

亭主逝く隣家の庭むかご採る

児等祝ふリコーダーの音敬老会

青空や蝋梅いち輪狭き庭

鉛雲学友逝く知らせ寒もどる

寒鰤は郷里の味と妹のいふ

しんしんと耳に残るか夜の雪

枯枝に下がりて赤き烏瓜

「ひな祭」　藤原壽（壽子）

はじまりは母なる水や木々芽吹く

ひな祭胎の記憶のあるといふ

寮に干すコットンパンツ若葉風

熱き血のブロードに透け更衣

ずぶ濡れも虹立つ夕もひと日なり

抜糸待つ指の孤独や赤い羽根

震災忌早く大人になった星

オムレツに赤きハートや冬ぬくし

「夫婦雛」　細川をさむ（修）

七草や心新たに喜寿迎へ

夫婦雛妻の作りし形見かな

椎の木に絡み登るや藤の花

紫陽花の藍に染まりし雨滴

迎火焚く足早に来る気配して

夏休み孫を見送る曲り角

指を折り俳句つくりの夜長かな

古写真思ひ出の増す秋彼岸

「火吹き竹」　前田道人（道紀）

掌に温し団栗独楽の預けらる

優しさは別離に不要竹の秋

石塀をもつたり散歩大百足

父も子もペンキのズボン初夏の風

腹くくりさてやらねばの日除かな

鯊釣の子等に入会ご挨拶

原爆忌市電に乗らぬ友のこと

火吹き竹吸ひて咽せる子初さんま

「破魔矢受く」　湯山得自楼（徳次郎）

破魔矢受く御籤中吉縁起かな

啓蟄の大地揺るがす震災禍

海棠の雨にもめげず咲き誇る

ががんぼやレースの襞に見え隠れ

新緑の池の辺に見晴台

軒端に端居顔なる猫のをり

滴りの一筋頬に磨崖佛

一枚田守る農夫に秋近し

随想　「素直な気持ちで」　近藤まき

自作自詠俳句研修会に入会してはや一年。俳句の楽しみ方や俳句づくりの心構えもなく、半世紀前に学校で習って以来のことに、脳細胞が刺激を受け、まるで昨今言われる「脳活」状態です。

俳句はわずか十七音（文字）ですが、作者のまた、読み手の世界観を膨らませてくれます。多くの作品（俳句に限らず）を鑑賞し、初心者であっても初心者らしく自分の言葉で句作を楽しみたいと思います。

今年は申年。埼玉・秩父神社「お元気三猿」の「よく見て・よく聞き・よく話そう」にあやかり、素直に見て・素直に聞き・素直な言葉で表現することを心がけてまいります。

随想　「俳句と私」

塩月崇史

私は人に自慢できる趣味として、三十才の半ばより続けている園芸がある。定年した時、ある人に頂いた「人生これからが楽しい」という言葉が趣味に連動すると思いつつ六十八才の折り第二の趣味として亡き父に勧められた詩吟を始めることとした。早いもので三年が経過し、それなりに詩吟の良さが理解出来る様になりかけた時、先輩に「俳句をやってみないか」とお誘いを受け、下準備もせず俳句研修会に入会となりました。　昨年七月の研修会に初出席した際、諸先輩の皆様に温かく歓迎して頂き、九月の例会には素直な気持で出席でき、ソフトランディングした次第です。全く素人の私に、例会毎にこと細かな指導とヒント等を与えて下さり、園芸、詩吟に続く第三の趣味になればと思うこの頃です。創作の基になる材料は今迄に体験した事柄、蓄積された知恵、感性を大いに活かして、ステップアップしたいと思っています。

自作自詠俳句研修会　実施事項

＊例会　毎月第二火曜日午後二時より

①　名句鑑賞・解説（当番制）

②　自作自詠・

自作俳句2句の紹介と1句自詠（独吟）

俳友の感想、先生の句評

③　自選一句（新聞俳壇）・紹介と選者範吟　合吟

＊行事　吟行会、懇親会、その他

＊句誌　「湧水」年1回

千代田岳精会自作自詠研修会　役員

参与

鈴木陵人
磯田烏城
岩崎泰俊
菊地駿風
徳本順治

運営委員

顧問　前田道人、名誉顧問　湯山得自楼
リーダー　橋本千舟、サブリーダー　細川をさむ
運営担当　久保合風、神田つねこ
伴奏担当　藤原壽、滝沢はる
企画担当　鵜飼てるお、塩月崇史
編集担当　細川をさむ、近藤まき
滝沢はる、　神田つねこ